
真剣で恋する五秒前！

西野二伸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で恋する五秒前！

【Nコード】

N8363Y

【作者名】

西野二伸

【あらすじ】

かつて神童と呼ばれた男『城下典二』は風間ファミリーに在籍していた。彼はあの武神と呼ばれる川神百代に、数年前に一度勝利した事がある。そんな彼は中学二年時に父親の仕事の都合で海外へ転校することが決まった。事実上の風間ファミリー脱退だ。時は流れて2009年のゴールデンウィーク明け、一人の転校生がやってきた。その人物の名は――

プロローグ1 『再び会えるその日まで』

昔、風間ファミリーには“五人目の男”がいた。

個性的な風間ファミリーの中で、あらゆる点で偉才を魅せる彼を、皆口々に『神童』と呼んだ。

若干十歳にして英語をマスター。韓国語、ドイツ語を通常生活で問題無いほどのレベル。更に数学では数学検定一級を取る。当時メディアから注目を浴びたが、全ての取材を断り、一部関係者に『神童』と呼ばれる。

武術でも、足技を主流とするサバットで有名な流派に弟子入りして、技術を全て盗んできた。

ただそんな彼でも『完璧』な訳では無い。極端なだけだ。

彼は興味を持ったモノを、学習するという点で天才的な学習能力を発揮する。

なので、韓国語、ドイツ語をマスターできないのも、学習する過程で飽きたのだ。いや、違うモノに興味を惹かれた言っても過言ではない。数学が優秀でも、漢字は苦手である。一度漢字検定を受けたが惨敗。

サバットの技術が完璧でも、最強ではない。普段から体造りを活発に行っていないので、体力的には一般男子高校生並。戦闘となっても、戦いを長引かせれば、敗北は免れない。

そんな彼は、風間ファミリーでNo.2的存在で、暴走する風間を上手く落ち着かせたり、ニヒルな大和の話に付き合ったり、家族がいない一子の兄のような存在であり、クラスから虐められていた京の心の傷を癒したり、百代の戦闘欲求解消の相手にさせられた。

それが彼、『しろしたてんじ城下典二』。

典二は十三歳の夏、東京の空港で風間ファミリーのメンバー全員に囲まれていた。

今日で典二は日本を離れ、ヨーロッパにて新たな生活を始めることが決まっていた。事実上、今日を以って風間ファミリーから脱退する。

「おいおい。皆そんな悲しそうな顔するなよ。俺まで泣きそうになっちゃうよ」

なんて気楽的な声を投げかけるが、殆どのメンバーは下を、空港の地面を見つめている。

「あっちに言っただって、電話やパソコンで連絡取れるだろ？ 今はネットが世界中に繋がっているんだから」

典二はわかっている。風間ファミリーは自分と連絡を取れないので悲しんでいるのでは無い。典二の傍に居られないのが、辛いのだ。

典二を心の拠り所としている京が、特に。

「ゴメンな、京。傍に居られなくて。でも我慢してくれ。今はお前が一人じゃない。風間ファミリーの皆がいるだろ？」

京は地面を見ていた視線を、少し上に修正する。ギリギリ典二の顔が見えない境界線だ。

「うん。私は大丈夫。でも、それとこれとは関係ないよ。典二に会えないのが、寂しい——」

しょうがないな。そんな感じで典二は両手を広げた。

「ほれ。最後の別れだ。別れの挨拶代わりに抱擁、てのはどうだ？」

京は迷わずに飛び込んだ。愛しい彼の、これからずっと会えない彼の胸の中に。

それに吊られて他のメンバーも典二に飛びかかった。典二は押しかかるメンバーの体重に耐えながら、泣きながら笑った。

これが、偉才の神童城下典二が生涯初めて流した涙だった。

ブローグ1 『再び会えるその日まで』（後書き）

初作品…ども…

俺みたいな高1でエロゲやってる腐れ野郎、他に、いますかってい
ねーか、はは

今日のクラスの会話

あの流行りの曲かつこいいとか あの服ほしいとか
ま、それが普通ですわな

かたや俺は電子の砂漠で幼女の幻覚を見て、呟くんすわ
i t · a m o e - a n i m e w o r l d . ブヒ豚？それ、誉め
言葉ね。

好きなエロゲ 真剣で私に恋しなさい！

初めてプレイした作品 つよきす（アニメ化はNO）

なんつつてる間に初投稿つすよ（笑） あゝあ、感想が欲しいね、
これ

プロローグ2 『思い出した、あの記憶』

父の仕事の都合で日本を離れていた典二の元に、久しぶりの日本人の来訪客が訪れていた。

前に風間が気分気のままに旅行していたついでに典二の元へ来訪したので一年振りだ。

日本人の名は『九鬼紋白^{くき もんしろ}』。あの九鬼財閥の末妹であり、九鬼政界対策部門のトップで在らせられる。

その紋白がわざわざ典二に会いに来たのは他でも無い、九鬼の従者部隊に空気が出来たのだ。その空気を埋めるべく、世界各国をスルウツの旅に出ている。

そんな彼女は日本にいる武神川神百代に数年前、唯一勝ったと言う典二の元に足を運んできた。

しかし紋白は典二に会うなり残念そうな顔をした。

彼女が言うには、典二には輝きが無いと。

数々の武道家を見て来た紋白は、典二の目が武道家とは違う一般人並の瞳をしていると。輝きの何もかも無い、墮落している人間の目だ。

だがまあ前であろつ。

典二には今の所興味を持つモノが一つも無い。

楽しそうな事を全てこのドイツでやり尽くして、暇を持て余らしていた。

一通りの球技やスポーツは勿論、勉強も物理や化学、そしてギターや音楽関係にも手を出してインディーズながらも固定ファンが付くほど上達。だが全てにおいて、途中で飽きたのだ。スポーツは昔百代と戦った時ほどの緊張感や勝利した時の快感を超えられず、勉強も大学院レベルまで極めたが飽きて、音楽は歌いたい曲を歌ってスッキリしたと。

今は典二の言う充電期間中なので、毎日毎日暇そうにネットで面白そうなものを探したり、学校の部活動の助っ人として体を動かしているだけだ。

そんな典二に会っても、彼の持つ魅力に気付く者などいない。

「……一応これを渡しておこう」

紋白は護衛役であるクラウディオに指示をして、一枚の紙を典二に渡した。

その紙には『九鬼家従者部隊入隊案内』と書かれた一枚のポスターであった。今回従者部隊の戦闘に特化した者の空きが出来たので、世界各国の有名な道場やジムにこれを配っていると。

「従者に成れると何か特典でもあるんですか？」

「うむ。賞金か、もしくはその者の能力に見合った優遇をしてやる」

典二は考えた。思考した。妄想した。考察した。瞑想した。思慮した。思索した。黙考した。思い巡らせた。

そして、昔成し遂げたあの快感を思い出した。

父の海外出張で三度で終わってしまった、百代との決戦を。

あの時は楽しかった。敗北させられた百代に、厳しい修行を重ねて勝利したと思つたら、たった二週間で自分よりも強くなった百代を相手にして、二回目の敗北。勝つて負けて勝利して敗北するライバル関係が永遠に続くと思つていた、あの日を。

忘れてしまつていた。この数年間くだらないことに興味を持つてやつていたからだ。

典二は思つた。

そつか。アイツと出会つたから、他のモノに、戦闘以外に強い興味を示さなかったのか。

だから俺は何をやっても中途半端なのか。

俺は、百代と完全な決着をして終わらせないと、他のモノに熱中できないな。

いつもの典二に戻つた。

否、

本来あるはずべき姿の『城下典二』になった。

彼は紋白達が出て行ったあと、支度を始めた。

九鬼従者部隊に入隊する準備だ。鈍^{なま}りに鈍^{なま}って鈍^{にぶ}くなった身体を鍛え直すためだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8363y/>

真剣で恋する五秒前！

2011年11月27日10時49分発行